

一 ぶっきらぼうな父

土曜日の夜、ぼくは夕飯の席で、その日の試合の話をした。四年生でサッカーを始めてから、初めてゴールを決めたのだ。

「右からけつたら、キーパーの手の先をぬけたんだよ。みんながかけよってきて、背中をばんばんたたかれた」

父ははしを動かしたまま、「そうか」と言った。

ゴールのあと、ぼくはすぐにフェンスの外を見た。ほかの子の家族は、立ち上がって手をふっていた。けれど、その中に父の顔はなかった。父は今日も、仕事だと言って朝早く出かけていったのだ。

「それだけの。ぼく、初めて点を入れたんだよ」

「よかったな」

父はもうテレビのニュースを見ていた。ぼくは返事をしないで、ごはんを半分残して席を立った。部屋のドアを閉める音が、思ったより大きくひびいた。ベッドにもぐつても、父の「そうか」が耳に残って、なかなかぬれなかった。

夜おそく、のどがかわいて台所へ行った。父はもうねたらしく、家の中は静かだった。テーブルの上に、父の黒い手帳が置きっぱなしになっていた。

いつも仕事の予定を書いている手帳だ。見てはいけないと思ったけれど、開いたページのすみに、ぼくの名前が見えた。

「悠斗 初ゴール 右足 前半十二分 いい顔をしていた」

ぼくは手帳を手にとった。前のページにも、その前のページにも、試合のことが書いてあった。「負け 最後まで走っていた」「声がよく出ていた」。日付を見ると、どれも父が仕事だと言っていた土曜日だった。

そういうば、フェンスのいちばん遠く、大きな木のかげに、作業服の人が立っていた気がする。父は仕事のとちゅうで、あそこからぼくの試合を見ていたのだ。試合の始まる時間だけは、父がいつも母に聞いていたことを思い出した。

ぼくはしばらく、手帳の小さな字を見つめていた。うれしいのに、さつきドアを強く閉めたことを思い出すと、胸がちくりといたんだ。

「何してる」

ふり向くと、父がねむそうな顔で立っていた。ぼくはあわてて手帳をとじて、テーブルにもどした。

「お父さん、来週も試合だよ。……また点、取るから」

父は少しだまってから、「そうか」と言った。そして冷蔵庫から麦茶を出して、ぼくのコップにもついでくれた。さつきと同じ「そうか」なのに、今度はちがう言葉に聞こえた。

窓の外を見ると、雨はいつのまにかやんでいた。ぬれた道が、街灯の光を受けて、やわらかく光っていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

二 無口な祖母

夕飯のとき、美咲は算数のテストをテーブルに広げた。赤い丸がならんで、上には大きく「百」と書いてある。クラスで百点は、美咲一人だけだった。美咲は、みんなに見えるように、わざとゆつくり紙をのばした。

「お母さん、見て。百点だよ」

母は「すごいじゃない」と手をたたいた。美咲は、向かいにすわる祖母の顔を見た。

祖母はテストをちらりと見て、「そう」とだけ言った。そして、また静かに煮物にものを口に運んだ。

美咲はテストを乱暴らんぼうにたたんで、ランドセルにおしこんだ。祖母がこの家に来て一年になる。朝、「おはよう」と言っても、祖母はうなずくだけだ。祖母のほうから美咲に何かを聞いてきたことは、一度もなかった。

「おばあちゃんって、わたしのこと、どうでもいいんだね」

部屋にもどってから、美咲は小さな声で言った。だれも聞いていなかった。ろうかの向こうの祖母の部屋は、その夜もいつまでも静かだった。

次の朝、美咲は台所の祖母と目を合わせないまま、「行ってきます」も言わずに家を出た。角を曲がったところで、水筒すいとうを忘れたことに気がついた。

走って家にもどると、門の前から二階の窓が見えた。窓のところに、祖母が立っていた。祖母は窓わくに手をそえて、少しせのびをするように、さつき美咲が曲がった角のほうを見ていた。

美咲は門の前で足を止めた。祖母は美咲に気づくと、あわてたように窓からはなれた。玄関げんかんを開けると、母が水筒を持って立っていた。

「はい、忘れ物。……おばあちゃんね、毎朝ああして、美咲が角を曲がるまで見てるのよ。雨の日も、寒い日もね。あの子は一度もふり返らないって、笑ってたわ」

美咲は水筒を受け取ったまま、しばらく動けなかった。昨日、テストを乱暴にたたんだ自分の手を思い出した。祖母にありがとうと言いたいのに、ゆうべの言葉が胸につかえて、顔が熱くなった。

美咲は階段の下まで行って、二階に向かって「行ってきます」と言った。声が少しふるえた。上からは何も聞こえなかったが、ろうかが小さくきしむ音がした。

角のところで、美咲は初めてふり返った。

窓の中で、祖母が小さく手を上げていた。美咲は水筒をにぎったまま、うでがいたくなるほど大きく手をふった。祖母の手が、少しだけ大きく動いた。

そのとき、雲のすき間から朝の光がさして、二階の窓ガラスがきらりと光った。

二 無口な祖母 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。